

研究主題 授業が人格形成の場となるための学級経営の研究
～子ども達に必要なコミュニケーション能力の考察～

要約：学級経営は授業の土台である。他者と接する能力が低下している今の子ども達に、授業の土台としてつけなければならない力の1つが、コミュニケーション能力である。コミュニケーションの主な手段は対話であり、対話能力は、情意的要素・技能的要素・認知的要素によって支えられている。それぞれの要素を伸ばし、子ども達のコミュニケーション能力を高めることが、授業を人格形成の場とすることにつながる。

キーワード： 授業 人格形成 学級経営 コミュニケーション能力 他者と関係する力 対話

I・はじめに

教育の究極の目標は、「人格の形成」である。人格とは、自分の意志を持って自分の進むべき道歩むことができる力である。また、学校における教育の中心は授業である。つまり、授業において、子ども達が自分の意志で自分の道を歩む力をつけることが、私たち教師の責務といえる。

では、授業が子ども達の人格を形成する場となるためには、何が必要か。私は、それが学級経営だと考える。授業以前の授業の土台である。どんなに優れた指導案があっても、学級経営が成り立っていない学級では、優れた授業には成り得ない。

これまで多くの教師が、学級経営はやって当たり前、できて当たり前を前提としてきた。しかし、残念ながら現状はそうではない。授業以前の土台の部分ができているために、授業が成立しにくくなっている学級も見られる。

そこで、あえてその土台に目を向け、授業が人格形成の場となるための学級経営を考察していくことにする。

II・なぜ今の子ども達にコミュニケーション能力か

今の子ども達が人格を形成する上で、授業の土台としてどのような力をつけるべきか。まず、今の子ども達の姿と、その背景を調査した。

残念ながら、今の子ども達の姿は、楽観視できない。「キレる」「不登校」「いじめ」「ひきこもり」「学級崩壊」など、さまざまな問題が噴出している。ここで、私がショックに思うのと同様に、着目しなければならないと思うことは、このような問題行動を起こす子どもに、いわゆる「普通の子」とよばれるケースが増えてきていることである。

このような今の子ども達の姿になった要因を、1つに特定することはできない。ただ識者が口をそろえて言うのは、「コミュニケーション能力が未熟である」「他者との交わりが欠如している」「他の存在への想像力が低下している」など、他者と接する能力の不足である。私も教育現場で子どもと接して、これには同感する。

たとえ要因を特定したところで、その要因を取り除くことは非常に困難であり、問題の解決になるとは考えにくい。それならば、今の社会を生きる子ども達に、どのような力をつけ人格形成をしていく必要があるかを考えることが、私たち教師にできることではないだろうか。

これらのことから、今の子ども達につけるべき力の1つを、私は次のように考える。

コミュニケーション能力

コミュニケーション能力を、ここでは「他者と関係する力」と捉え、今の子ども達のコミュニケーション能力を伸ばす学級経営案を作成することを、本研究の目的とする。

III・研究の方法

主な研究の方法は、次の4つである。

1. 文献などによって、今の子ども達の実態、コミュニケーションの理論、コミュニケーション能力を伸ばすための指導法を調査および考察する。
2. 授業によってコミュニケーション能力を伸ばすための手だてを実践し、その有効性について検証する。
3. 公開研究会などへ参加することによって、コミュニケーション能力を伸ばすための工夫や手だてを観察および考察する。
4. 筆者のこれまでの実践に、上記1～3で得られた考え方や手法を加え、コミュニケーション能力を伸ばす手だてを整理し、本研究のまとめとする。

IV・研究の内容

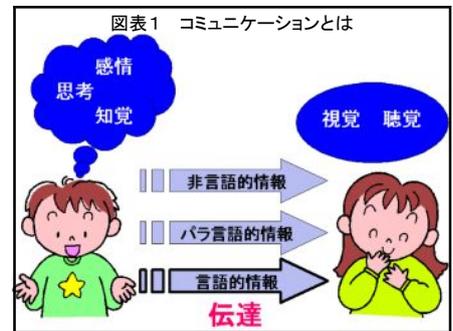
1・コミュニケーションをどう捉えるか

広辞苑には、コミュニケーションとは、「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達」と記述されている。

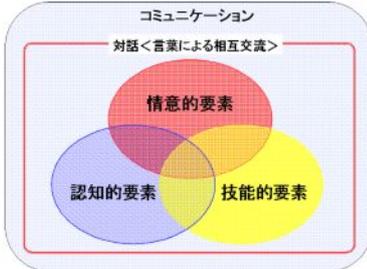
また、村松賢一はメッセージの伝達には、3つの径路があるとしている。(対話能力を育む話すこと・聞くことの学習－理論と実践－明治図書2001)

- 1つ目は、ことばのやりとりである「言語的情報」。
- 2つ目は、声の高低、強弱などの「パラ言語的情報」。
- 3つめは、うなずきや表情などの「非言語的情報」である。

また、コミュニケーションの1つの手段が対話(言葉による相互交流)であるとし、対話能力は「情意的要素」「技能的要素」「認知的要素」



図表2 対話能力を支える要素



自分の思いを伝え他者の思いを理解できることが、今の子ども達の姿から見た、私の目指すところである。よって、対話能力をどう伸ばしていくかを考察していくこととする。

2・実践授業による考察

3年生の子ども達に対して、6月に5時間、10月に5時間の、計10時間コミュニケーション能力を伸ばす手だてを実践し考察した。以下に概要を述べる。

実践1・仲間作りゲーム

○ねらい

だれとでもかかわることのできる雰囲気を作る。(情意的要素)

○主な学習活動

教師が指定した人数の男女混合グループを作るゲームをおこなった。ゲームの途中、教師が全員を集めて「なぜかかわる必要があるのか」子ども達が納得するように話をし、再度ゲームを続けた。

○子どもの変容

はじめはふざけて走り回る子どもや、誘われても逃げる子ども、仲のよい友達と固まって離れようとしないうちの姿が見られた。よって、なかなかグループも作ることができなかった。

しかし、教師の話を聞き、活動の意味と教師の願いを子ども達が理解することによって、誰とでもすばやくグループを作ることができるようになった。また、グループができた子どもでも、まだ周りのグループができていない友達へ配慮する姿が見られるようになった。

図表3 子どもへの語りかけ



○考察

教師が、かかわる必然性と教師の方針を子ども達に話することによって、子ども達の中にだれとでもかかわろうとする雰囲気が生まれた。これは、今自分がやっていることの意味を、子ども達が「考え」と「精神」で理解したからである。

学級のリーダーである教師は、どのような子ども達や学級に育てたいのか明確な目標をもち、それを子ども達の心に響くように話す必要がある。そして、その目標に向かって地道に実践を行い、子ども達が変容した事実を積み重ねていくことが学級経営だと考える。

実践2・心で聞くとはどういうことか

によって支えられていると述べている。

確かに対話以外にもコミュニケーションの手段は考えられる。しかし、日常のコミュニケーションの大部分は対話である。また、言葉によって、

○ねらい

「目と耳と心で聞く」ことの意味がわかる。(情意的要素)

○主な学習活動

前時に、話を聞くときには、「目と耳と心で聞く」ことを指導した。目と耳で聞くことは表に現れる行動だが、心で聞くことは、表に現れない行動であり、わかりにくい。

そこで、あえて「心で聞かない」とはどうか、子ども達に体験させた。計算プリントをやりながら、読み聞かせを聞くという、「心ここにあらず」の状態では話を聞かせ、読み聞かせした本の内容をあとで尋ねた。

○子どもの変容

前時の教師の話によって、子ども達は、「目と耳と心で聞く」ことを頭ではわかっていた。しかし、上記の学習活動で、「心で聞かない」ことを身をもって体験した子ども達は、次のような振り返りをした。

- ・耳では聞いているんだけど、内容は全然覚えられなかった。
- ・心を使ってよく聞かないと頭に入らないことがわかった。

80%の子ども達がこのような振り返りをした。振り返りを見るとわかるとおり、「目と耳と心で聞く」こととはどういうことか、またどれだけ大切か身をもって感じる事ができた。

○考察

あえて「心で聞かない」状態を、子ども達に身をもって体験させることによって、抽象的でわかりにくい「心で聞く」ことを、子ども達に理解させることができた。教師の願いを、子ども達の心に響くように伝える工夫をすることによって、子ども達の心も行動も変容すると考えられる。

実践3・問答ゲーム

○ねらい

根拠を明示して論証的に話す力をつける。(技能的要素)

○主な学習活動

問答ゲームは、三森ゆりか(言語技術教育の体系と指導内容 明治図書 1996)が、上記のねらいで開発した訓練方法である。次の基本的な論証的な言い方を身につける。

- 問「あなたは〇〇が好きですか。嫌いですか」
 答「私は、〇〇が好きです」
 問「どうしてですか」
 答「なぜなら、……だからです」

○子どもの変容

はじめは問われることに戸惑っていた子ども達であったが、慣れてくるにしたがって、問答ゲームを楽しみながらおこなうことができた。子どもの振り返りは、次の通り。

- ・自分が何を好きって聞かれるかわくわくした。
- ・友達の理由を聞くのが楽しかった。
- ・慣れてきたら理由を考えるのがおもしろくなってきた。

ほとんどの子どもが「楽しかった」と振り返った。単に楽しいだけでなく、子ども達に

簡単な理由を考えて話すことの基礎を身につけることができた。

○考察

コミュニケーションの主な伝達経路は、「言語的情報」である。つまり、子ども達の話す技能を伸ばさなくてはならない。本実践においては、論証的に話すとはどういうことか、子ども達は理解することができた。

しかし、数時間の実践なので、まだ普段の授業や生活に生きるレベルではない。年間を通じて、粘り強く指導していく必要がある。

実践4・1対1の対話

○ねらい 応じる技能を伸ばす(技能的要素)

○主な学習活動

2人1組で対話をする。対話のテーマは「今朝食べた朝ごはん」「さっきの休み時間何をしたか」など、子どもの経験した事実にして、どの子どもも話しやすくした。話し手と聞き手を30秒で交代する。また聞き手には、話しやすい聞き方を意識させた。

○子どもの変容

1対多の対話では、話し手が多数の聞き手に向かって話をするため、聞き手が積極的に聞くことは難しい。しかし、1対1の対話では、話し手は紛れもなく自分に対して話をしているのだから、自然に目を見たり、頷いたりしながら能動的に応じることができた。子ども達の振り返りは、以下の通りである。



図表4 1対1対話の様子

- ・Aさんって、話してみると明るくて楽しかった。
- ・私とCさんは似ているところがあった。何だか嬉しかった。

○考察

1対1の対話は、能動的に聞くことができるので、応じる技能を伸ばすために有効な手だてである。

また、1対多の対話では、全員の子どもの話し手になるのに時間がかかるが、1対1の対話では、短時間ですべての子どもを話し手と聞き手にすることができる。よって、子どもにより多くの活動を保証することができる。

75%の子どもが、友達の知らなかった面に触れることを、心地よく思う感想を書いていた。1対1の対話は、子どもどうしの関係づくりにも有効だと言える。

3・研究会などからの考察

①愛知教育大学附属名古屋小学校

本校は、各教科で大切にしたい力を「教科力」として明確なねらいに設定し、教科力を発揮できる子どもに育てるための指導法を確立しようとしている。

そのため、指導法の工夫が授業の随所に見られた。例えば、国語科においては、教師の自作

ビデオを子ども達に提示することにより、ねらいに確実に迫ろうとしていた。社会科においては、子どもが考えを深め公正な判断を行えるために、授業の流れを工夫していた。

これらの指導法の工夫により、子ども達に学習内容をよく理解、定着させていたように思われる。ワークシートやノートを見ても、どの子どもも、自分の考えを書き、自分の主張をもって授業に臨んでいた。

しかし、課題も見えてきた。ワークシートやノートに書かれた自分の考えをうまく他者に伝えられないため、子ども達の思考が深まっていけない場面が見られたのである。

では、どのような手だてをとることが考えられるか。次のように考察をした。

教師が、子どものコミュニケーションの橋渡しをしない。

子どもの話す声が小さい、話す内容が未熟であることが、伝えたいことが伝わらない話し手側の大きな理由である。また、小さな声や未熟な話でも何とか聞こうとする意識が弱いことが聞き手の問題である。そこで、教師が子どもの発言を繰り返して言い、周りの子ども達に伝える場面が見られたのである。

これでは、話し手には伝える必然性が、聞き手には聞き取る必然性が生まれにくい。教師が子どもどうしのコミュニケーションの橋渡しをせず、話し手の話す技能、聞き手の聞く技能を鍛えていくことが必要だと考える。

②山口大学教育学部附属光小学校

今年度、本校は、『『かかわり合い』を通して学びのつながりを見つめる授業とカリキュラム』と研究副主題を設定している。また、1996年には「子どもとつくる“授業のコミュニケーション”」という書籍を出版している。長年、子どもどうしのかかわりを大切にしながら、研究と実践を積み重ねてきた学校である。

本校の研究会に参加して、子ども達をかかわらせるために工夫していると感じたのは、次のことである。

小グループでかかわらせる場を設定する

多くの授業では、子ども達に自分の考えを発表させるとき、いきなり全員の前で発表させる。話すことが得意な子どもは、これでもよい。しかし、そうでない子どももいる。そうでない子どもの方が多いくらいである。その子ども達は、どんなにいい考えをもっている、いきなり大勢に向かって話すことには抵抗がある場合が多い。

そこで、本校では小グループという場を設定していた。それぞれの子どもの考えをもったあと、隣の子と考えを言い合ったり、班で言い合ったりさせていたのである。これは、非常に効果的だと感じた。

全体の前では自分の考えが言いにくい子どもでも、隣の友達になら言いやすい。班の友だちになら言いやすい。

また、隣の友だちや班の友だちに聴いてもらったことによって、子どもは自分の考えに自信を持つことができる。実際、自信を持った子ども達は、全員の前で発表できるようになっていた。

つまり、小グループでかかわることには、自信を持たせる効果、練習の効果もあると言える。

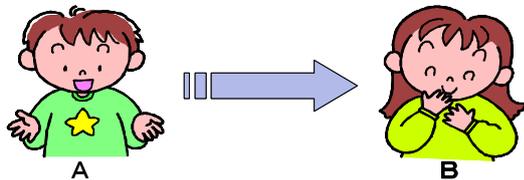
V・コミュニケーション能力を伸ばすための学級経営案

本研究の結論として、右の学級経営案を示す。村松賢一は、コミュニケーションを、次の3つの形態に分類している。

図表5 コミュニケーションの形態

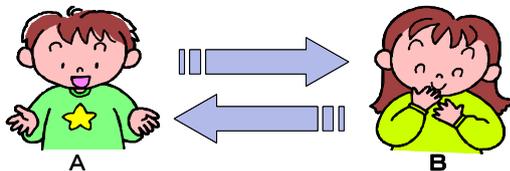
1・通信モデル

AからBへの一方通行の伝達。



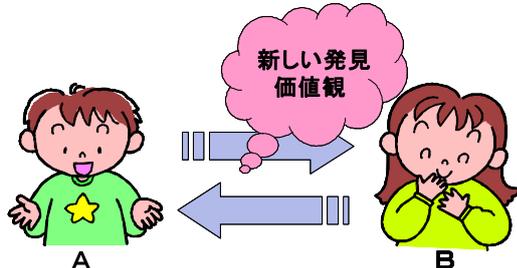
2・双方向モデル

Aからの働きかけをBが受けとめ、Bからの働きかけをAが受けとめる。



3・相互作用モデル

双方向モデルのようにお互いに作用しながら、新しいものを生み出す。



私が授業において目指すのは、相互作用モデルのコミュニケーション形態である。他者の話を聞き、自分の思いを言葉で表現することで、学級集団に新しい価値観や考えや発見が生まれる授業である。

相互作用モデルのコミュニケーション形態で、子ども達がお互いにかかわり合いながら、新しいものを作り上げ、それを自分たちの向上的変容だと自覚する授業。このような授業の経験を積み重ねることが、子ども達のコミュニケーション能力を伸ばし、他者とかわることのよさを実感し、ひいては他者に積極的にかわりながら理解をしていこうという人格形成につながるのだと考える。

見ようによっては、学級経営案に書かれていることは、当たり前のことばかりである。しかし、当たり前のこと、ささいなことを、毎日積み重ねていくことが学級経営だと考える。

これらのささいなことを、毎日の授業において実践し、変容した事実を積み重ねる。そして、子ども達の人格を形成していく授業に少しでも近づいていく。

ゴールなどありはしないが、それを目指して目の前の子ども達に向かい合っていきたい。

図表6 コミュニケーション能力を伸ばすための学級経営案

情意的要素	学級・授業づくり	A-1・学校は楽しいところという雰囲気を作る A-2・困ったことは先生に言えばよいと教える A-3・学級や学校のルールを教える A-4・学校に来てからの準備や、帰る用意、身のまわりの整理を定着させる A-5・朝自習、掃除、給食のシステムを定着させる A-6・自己有用感をもたせる A-7・ひとりひとりの活動を保証する A-8・子ども達だけで動くことができる事実を増やす A-9・学級の向上的変容を自覚させる A-10・差別と弱肉強食をつくらない A-11・相互作用モデルのコミュニケーション授業でみんなで新しいものを生み出す体験をする
	担任と子どもとの関係づくり	B-1・先生は、みんなのことを愛していて、みんなの味方だと伝える B-2・あいさつと握手でかわる B-3・できるだけひとりひとりと話をする B-4・教師の方針を語る B-5・どんなとき教師は怒るか話す B-6・1人1人の素敵なところを認め励ます
	子どもどうしの関係づくり	C-1・かわる必然性を趣意説明する C-2・あいさつやゲームでかわらせる C-3・自分や友達の伸びを自覚させる C-4・それぞれの子どものよいところをとりあげ、目をむけさせる C-5・授業の中で多くの友達と関わる場面を設定する
技能的要素	聞く技能	D-1・教師がしつこさをもつ D-2・よい姿勢をとらせる D-3・傾聴態度（耳+目+心）を指導する D-4・発言を区切り、今誰がなにを言ったのかをしつこく問う D-5・発言を区切り、発言の続きを言わせる D-6・発言を区切り、友だちの発言を自分の言葉で言い直させる D-7・目で聴いていないと答えられない発問を増やす D-8・クイズや楽しい話、読み聞かせなどで聞く力を鍛える D-9・「は」と「も」を使い分けさせ、考えが同じか違うか意識して聴かせる
	応じる技能	E-1・「耳+目+心」で聞く指導をする E-2・うなずきながら聞かせる E-3・相づちを打たせて聞かせる E-4・話し手が話しやすい聴き方を意識させる
	話す技能	F-5・1対1の対話で応じる技能を育てる F-1・あいさつを徹底する F-2・大きな声で返事をさせる F-3・「ありがとう」を言うようにする F-4・手の上げ方を指導する F-5・自分の考えは言わなければ伝わらないことを教える F-6・一番遠い人に聞こえるように発言させる F-7・音読や群読で声を出す楽しさを知らせる F-8・学級みんなで話をする時間を多くとる F-9・リレー発言で全員に発言させる F-10・話し方の典型を教えて話しをさせる F-11・理由をつけて自分の考えを言わせる F-12・問答ゲームで論理的に話す力を伸ばす F-13・簡単なスピーチをさせる
認知的要素	はこぶ技能	G-1・教師が指示をせず、自分から発言させる G-2・簡単な討論の授業をする G-3・ディベート、討論、モラルジレンマの授業で話し合い、はこぶ技能を育てる
	思考力主に書く活動を通して	H-1・筆箱の中に入れる物を指導する H-2・正しい姿勢で机に向かわせる H-3・はね・はらい・とめを意識させて文字を書かせる H-4・ノートの使い方（日付、マス目）を細かくチェックする H-5・定規を使って線を引かせる H-6・連絡帳を視写させ書く力を鍛える H-7・「なぜか作文」で論理的思考力を育てる H-8・見開き2ページで授業をまとめる